

皇國には、神武天皇以來長壽の人々多く見わたる中にも、武内大臣をば上古以來の長壽人とは成しけるゆゑに、五雜俎・海東諸國記などにも記載し、仁徳天皇の大御歌にも、汝こそは世の遠人、なこそは國の長人と詠じ給へり。是長壽人を國老と呼び、或は年寄・家老など呼べることの起原ともいふべし。湯淺祇庸の藩國官職通考に、家老の名目は、左傳社註に、家老と見ゆ、又魯論子路篇爲趙魏老則優とある朱註に、老家臣之長云々。家老望尊而云々とあり。家老の號、我が朝後世に初るに非ず。漢土久遠に起り來れる事と知るべし。又年寄の稱は、永正六年將軍義植君細川左京大夫へ賜はる御教書中に見ゆと、下學老談にいへり。吾が前田家に於ては、高德公遺誡中に、村井豊後・奥村伊豫兩人家の年寄と載せ給ひ、慶長十六年瑞龍公、老中・人持等への御書出に、年寄共令相談筑前守へ異見可被申付事と載せられたり。是等に因りて見れば、執政の人々をば年寄中と稱し來るも古き事なりといへり。平次按ずるに、年寄・家老の名目は、國初の頃は老齡の人を柱石の執政とせられし故に呼びそめたる稱なりしかど、後には其の家柄を定め、門

流を旨とせしゆゑに、若輩の人といへども、執政の柱石と成る壯年の人をば年寄・家老と呼べる事とは成りたり。按ずるに、慶長十一年頃の執政は、篠原出羽守一孝・岡嶋備中守一吉・山崎長門守長繼・横山大膳長知・中川巨海齋宗半・高山南坊等伯・江守平左衛門元家七人、連署の奉書古定書等に載せたり。元和三年秀忠公龍口邸へ渡御。拜調の國老は本多安房守政重・横山山城守長知・奥村河内守榮明・松平伯耆康定・横山大膳康玄・横山式部長治・神谷信濃守近孝・宮田下野守重政・今枝民部直恒九人なり。同六年神田邸へ渡御の時拜調の國老は、本多安房守政重・横山山城守長知・前田對馬直正・長九郎左衛門連頼・奥村河内榮政・横山大膳康玄・小幡宮内長次・奥村因幡易英・富田下總直吉・神谷信濃守守孝・津田勘兵衛重次・今枝民部直恒・生駒内膳直義・脇田帶刀重俊十四人なり。又承應三年の頃執政の國老は、前田對馬・奥村因幡・津田支藩の三人、本多安房も小松へ相詰めける時は、右三人と同席に而相勤め、江戸御用は今枝民部、金澤城代は小幡宮内、小松城代は前田内藏助なり。また人持六組に而、其の頭は本多安房・前田三左衛門・長九郎左衛

門・横山左衛門・前田對馬・奥村河内六人なり。因幡・支藩は御仕置方相勤、未組付にて罷在と藤田安勝筆記にいへり。又寛文元年の頃寄合と稱候者は、本多安房・前田三左衛門・長九郎左衛門・横山左衛門・前田對馬・奥村河内・奥村因幡・小幡宮内・今枝民部九人なりとあり。寄合は執政席の人々をいへり。萬治元年十月御印書出に、一ヶ月兩度宛本多・長横山・小幡四人宅へ寄合、其日の亭主用儀をしらべとあり。是寄合の名稱の出處なるべしと湯淺祇庸いへり。扱貞享三年十一月十三日參議中將綱紀卿の書簡に、大年寄には本多安房殿・前田佐渡守・奥村登岐前・奥村伊豫時、人持組頭は前田備後直・長九郎左衛門前・横山左衛門義、年寄役には横山筑後・津田支藩・奥村因幡、若年寄には前田備前・前田對馬・多賀新左衛門を被命、大年寄を御家老・大家老と稱し、人持組頭をば七手頭といひ、年寄役を御家老と稱す。其の後は諸大夫たりし面々をば御家老と云ふ。是は別に命を蒙りたりと藩國官職通考にいへり。按ずるに、松雲公夜話錄に、公儀にては御家老と申、御家にては大年寄と申也。文字は大老と書候而も、大としより又は大年寄共、

何れとも書候由、度々御意也とあり。扱前顯の如く貞享三年に本多安房・前田佐渡・奥村登岐・奥村伊豫を大年寄に被命、前田備後・長九郎左衛門・横山左衛門を人持組頭に命ぜられ、此の七人をば七手衆と呼びけるを、此の後元祿三年九月廿九日に村井出雲親長を人持組頭に命ぜられ、是より以來右八人をば八家と稱し、執政の家柄となし、叙爵任官も此の八家に極り、若年にて家督すといへども加判の列に加へられ、壯年・若輩とても年寄衆と呼び、年寄は執政の名目の如く成りたり。或は云ふ。世に町年寄或は村年寄などといへるも、皆昔は老齡の人を撰擧せしかど、後には名目と成りて、年齢にかゝはらず呼ぶ事と成れりと。是舊藩中の國老・大老・家老或は若年寄などの名稱と同様なりといへり。右は前田源隨老の履歴の因みに依つて、舊藩國老の頭末を記載す。

○前田駿河守孝貞傳話
享保錄に云ふ。奥村登岐庸禮は十九歳にして執政に命ぜられたり。皆人其の人才を賞美し、速廻太子と異名を付けた。また前田駿河守老源隨は、十七歳にして執政席へ加